

NASC CLASSIC CAR RALLY SERIES 2007

NASCクラシックカーラリーシリーズ2007

2007年2月17-18日 @茨城県、千葉県250km

text & photo : NASC RALLY事務局



コマ図を受け取り、作戦を立てるエントラント。上位入賞のためには、しっかりとしたルート選択が重要になるため、真剣な眼差しでコマ図をチェックする。



タイム計測をスタートする、岩崎一貴さんのトヨタ2000GT。珍しい左ハンドルということもあり、多くのギャラリーが運転席を覗き込んでいた。



'66年式のメルセデス・ベンツ190SLRで、神奈川県より参加していたNO.10大矢義夫さん。ボディに張られたイベントステッカーが経験の豊富さを物語る。



NO.8高岩芳宏さんがドライブするMG MAGNA。'33年式と70年以上も前に生産されたクルマだが、軽快なエンジン音を響かせ次々とCPをクリアしていく。



2日の間好位置をキープし優勝を飾ったNO.26西村恵隆さんの'57年式のACエース・プリストル。各地のイベントでも好成績を収めるベテランドライバーだ。



栃木県より参加したNO.31高橋敏夫さんの'73年式ポルシェ911。コ・ドライバーとの息もぴったりで、快調にCPをクリアし、次のポイントに向かっていく。

NASCクラシックカー・ラリーシリーズは今年で2年目を迎え、初心者からミレリアの参加経験を持つベテランまで、幅広い選手が同じフィールドで競うラリーイベントとなっている。エントリー台数は競技を円滑に進めるため60台限定となっており、チェックポイント数も毎回30個以上が設定され、ラリーのトレーニングイベントとしての色合いが強い。シリーズは年4回開催され、ポイント方式を採用し年間シリーズチャンピオンが決定される。

毎回イベント前日にはビギナー向けのラリースクールが開催され、基本ルールの習得やテクニックを学ぶことが出来る。また、ベテラン選手にはNASCオリジナルTAGホイヤーの無線計測トレーニングシステムを使ったセンサートレーニングを実施し、更なるレベルアップが図られている。

2007年のシリーズ第1戦は競技の合理化を図るため、高速道のサーブिसエリアに各車指定時刻に集合し、チェックポイントのセンサーを選手が足踏みしてのスタート

であった。その後、早春の筑波スカイラインを越え連続CPのあるポテリンの森に移動し、そこで4連続CP×2回=8CPをこなしメインステージのNATS(日本自動車大学校)に移動。ここで各車トレーニング走行をした後、連続8CPという高度なテクニックを必要とするサーキットドライアルにアタック。2回目はこのコースを逆走する設定となっており、ここでDAY1は終了。CP26個をこなしリタイヤ0台という、クルマにもやさしい競技設定であった。DAY2は前日の晴天とは打って変わって朝から大雨、しかしそんな天候の中でもエントラントは楽しそうにスタートし成田から高速道を使い銚子港へ。そこでCPをこなし、犬吠崎のCPへ移動後昼食をとりNATSにて最終のシークレットCP2個をこなしゴールへ。トータル35CPを消化し2日間でリタイヤ車輛は1台のみという素晴らしい結果で終了となった。

シリーズ第2戦は6月9、10日軽井沢をメインステージに、開催が予定されている。



NO.9栗原健彦さんが駆る'48年式フィアット チシタリア。生産から60年近く経った現在でも、コンディションは抜群で軽快なエンジン音を響かせる。



競技運営をスムーズにするため、タイム計測のスタートがアシ踏み式と、ユニークな方法がとられた。ストップウォッチを握り締め、いざスタート。





48年式のベントレーで、参加していたNO.12吉田勝伸さん。その大きな巨体と圧倒的な存在感で、会場に居合わせた一般の人たちの注目を集めていた。



NO.2佐藤公夫さんがドライブする、'56年式アルファ・ロメオ ジュリエッタ・スプリント。初日は3位と好位置だったが、2日目で出遅れ結果は5位となった。



250kmを駆け抜けた、2日間のタイムラリー



颯爽とゲートを潜り抜け競技をスタートするNO.19延原靖さん。オープンボディのMGAで、競技と共にドライブも楽しむことができたようだ。



数多くのヒストリックカーイベント経験を持つ、「伊香保おもちゃ博物館」の館長NO.29横田正弘さんは、お馴染みの真っ赤なトロネード・タイフーンでの参加。



計測ラインを通過し、決められたタイムで一定の距離を走るだけで、百分の1秒で順位が変わってしまうため、見た目以上に難易度の高い競技となっている。



スタートゲートをくぐってきたのは、NO.16芳野正明さんがステアリングを握る'67年式トヨタ2000GT。誇らしげに掲げられたシングルナンバーが印象的。



ドイツ車ブームとしても有名なNO.23大津善弘さんは、'59年式のメルセデスベンツ300SLで登場。直列6気筒の3000ccエンジンは、最高出力215psを誇る。



日本にはこれ1台とも言われる、NO.33佐藤行延さんの48年式のフィアット8V。チャイニスズアイとも呼ばれるツリ目型4灯のヘッドライトが特徴的な1台。



埼玉から参加していたNO.22佐藤二夫さんの'54年式ジャガーXK120。盛り上がりを見せるファンダーと絞り込まれたボディラインが非常に美しい1台。



'62年式のボルシェ356で、東京から参加したNO.7高藤和寛さん。フラット6とはまた一味違う、独特なフラット4サウンドを響かせながら競技をスタート。



'72年式ボルシェ911で参加していたNO.24木村昭裕さん。計測ラインを通過し競技をスタートすると、コマ図をチェックし次のルートをしっかりと確認。



愛知県から参加した、NO.14天野正治さんのジャガーEタイプ。しっかりと磨き上げられた美しい個体で、悠然とゲートを抜け競技をスタートしていた。

Car Mag.'s Pick

1969 MORGAN PLUS 8 「クルマも引き立つコスチューム」



大阪から参加の、NO.4福川淳一さんがドライブするのは3500cc V8ユニットを搭載し、最高出力160psを発生する'69年式モーガン・プラス8。コ・ドライバーとは頭から足まで全身白で統一されたお揃いのコスチュームを纏い、イベントに参加していたエントラントの中でも一際注目を集めていた。

イベント2日目はいよいよ雨模様だったものの、エントラントは雨中での競技も想定済みだったようで、天候など関係ないかのようにCPを目指す。

■ イベント問い合わせ先
NASC sandworks project
URL : <http://www.nasc-swp.com>